



鴻猷録

四

特  
巻18  
13/4  
4





門へ 13  
1314  
巻 4

相列  
泉善  
浦賀

鳩灌雜話 四

美

洛東祇園町邊に住居する井上何某  
といふ画師當時河東より美と稱せらる  
妓女等の染画或は写し出はるるを  
紅毛の人物をかきぬるものあれば總  
神を倣ふ艶動人情を勅らせぶ京大坂  
近所の雅人等もよくけ画を賞翫して  
笑人洛東より市城よりけるもの西



大猪俣の家申 完戸控を申つといふ人縁  
五千石成領トて家系を画しく年  
を物老をる物の及理をも并ゆる人  
物おれ一赤中の用も又怪うらねと記す  
或人け井上何某が字画成勢一來つと  
付書け画をう京教して流りまるはし  
中右控を申 是を思ふようといふ記女の  
娵画よして右眼の精神高舌のぬぼ  
一千員人の面侍小御密紙を一しる

筆妙傳は活るめくされは夫は感知して  
け画ハ何者を写し一おれと同し別處  
時京教紙園町よ於て美の強一と書はに  
本屋のことといふ藝妓の娵画よして  
空色の艶を申よあらずころむせも又  
一先年をありて傳原の廓よ編され  
一と記

罷さくてうたふるやるの月  
さらふあらけおの都都は傳つく聽人



歎き世ざらぬや、  
田舎より世及者も先種園漬あとの世  
は女を二思せんと競ふなりと法ぶこふは  
流物結むば橙を染、  
塙世思るるに、  
逸多しといどもけうたまがらやど  
る調子、  
いとつのお町夜通娘、  
と大いおを勅して、

よ運ひ物々こそ海ま、  
揃ふ細年お細さあらぬ作、  
色目くお海場や、  
の花と飾め、  
いそ色、  
新へ、  
京都、  
手捲の藝、



神は誓ひ佛よいのり役人よ殖海して京  
橋の役付成程ひくろが神佛の奇持へを  
ど若く金の光忽輝太坂毎主居小撰くれ  
て志すくろが太役の事有以用志げく周知せ  
好孫へ傍は虚病成構一有る入湯と披爲  
志くみ十日の曉成程ひ密よ上京志く本  
屋町小借産ぬをかり出入の以服所を  
かろろろろ一紙軍町は控所せんとおども  
急たすくろ井崗一チカ扇れろろ太喜様

の事同ごとらて太坂登屋敷一ツも  
あると密する川端の小喜様を求先是  
服所を同付して志すくろが先出さるハ  
喜絹の紋付の羽織よあつてひらいたらうご  
ト女のひんぬきで紫柄の太小居下りふ二  
階一軒通きいあーきせのどきん蓋あさうお  
らうらへア人成をらま本屋の先生い外  
の橋へ請せられてけろろの四色子かのおな  
ら来とさんら交がる遠ふくろ来急さ公





鳥  
籠  
四

五



九  
籠  
四

四











中り花車お飯を越あうせむめのおみ半  
へそんおお強い出来ませぬとさげさい  
何分程座敷首尾さへ揃へば二百あや  
と百あいにとぬとあけてははらうもる田舎  
たききみみ十日とらふ限ある程具され  
べとふぞあややうがわりそふなものと服  
乃とやぬけー花車が乗死まづことよ  
喰こんどらやとりめを地合むらりとゆた  
はあふおてびまのちうーまるとまのそとま  
はあふおてびまのちうーまるとまのそとま

うらげん會のそ藝妓の越揚おみの大  
集生例の夜喰二軒茶屋の軒やーさ  
阿弥でふ像の仕出ー小このでふ踊の後  
右まうと輯お実う入る茶屋園技と知己  
ふさるおお座丁を叫よやらお八百屋の娘  
かお終て座敷帯の娘いあうと輯う川  
亭我の述作そらまい後者かお井筒の  
主人の和衣自伝坊の茶會回つ井つら  
西阿弥か佳の苗田つた大村屋がむりり



九 溝 四  
浪舟の津渡が系後よりの竹林との  
とせが太坂つ橋入とて鳴まて受け電る  
藤の乃い多たれど流がまるおいか教へ  
よゆくのやこの一ッ方ちかしても振らぬの  
芋でそれぬお鞠い芝居てまる田舎侍  
乃惣合引のむしとめらるるの糸もよ  
十日やどれせまのそみ十日のおいとぬ  
花車がなるあはうしがもと卯あつく  
こもふ巻強のなごころたもよ味あつ

のまの田舎者されどうつて義理ははらうい  
人情まんさうはれたまうても志まされ  
孫べおまつさぬのい海切いきけと交てしま  
まをむともこちらにちつと引くつて  
うとまのなはがままごころれのむさ  
野う途あつ何こまても退ふてけの  
そろうけんふこまもこごげとちそん  
病まうして再あつぬまの細布物  
せまた粒たまが海路々も病まおま







病を承りてあぐめ十日の目切のきこり月の  
 切を始りたまされことむい付どもさる子  
 つまひこんど付るし一い二千ぬ余所陰邊  
 役してうらやだいなあつ飯一ツみねむと見  
 船も手挽さうらぬお弁人の花子依  
 さゆも袖さましとあ川とおらるゑん  
 染画一枚うす梓よあみ手石造く大坂  
 強屋あつびやうまら志道逢よる役人  
 いこみ慈念の明友家柄を云とてこの是

見よる身も面目う先祖紙おひさる子  
 紙あひ下先大坂下ぶーと旅宿とく  
 付あ相い造く依見之出ーて中身ハ給  
 小あ川さだ相織大い志やんと一僕よ狭  
 兼をもせ作回備道在依見つ出ると  
 あひーよさふーとこのやううかくと川  
 東一東く四糸の板橋を後るよ始めて  
 怪根つさ達仁寺町を下つさるう人と  
 四糸の角成まがりさぎ本屋のつさお







落をさうせし一生涯命こまきハアレイ  
 と叫びまがらお干くら下つ死ありる  
 敵のうさどと権を失も獲くおす  
 うら死ごととあつて目かさむじむは  
 よあつぬ國の軍中あふり敵をり  
 んら敵の一件ハ新しけても終るぬ色  
 情の急氣地必死を著されべこそる  
 くあつて己は死を無命よちう  
 人抽鷲のこふい七つでもあらんらと思

ふららその透るよと志らく明後之  
 ばあを押しあさうの垣根よをの  
 ひもとあつて白草の涼しくも池よさら  
 甲は見えざるをやくんを終るや  
 後一琉球風呂の炭炭あを一猫箱の  
 唐茶よをうこつて殺洗ふ折あ用人  
 出くは後取らうは出仕あべさあ箱  
 情系りしとあせへ何りやう人と  
 子髪月代中付上下とあ付ては後新し



孫出する所は交際家の娘君なる輩上  
方の所屬申す定り有る付く事類に  
涉る後母の所實物方兼帯の役付ハ  
控在事つが多年の念願成就の事也  
却るいへ上京する事遠程乃其  
け渡り教回奏を獲らば扇として  
よ出に

鳩灌雑話四 大尾

名聲口上

叔どおしく極つも中とほするを年を造て  
おりきける私に法見負やぶらうま  
て中政をせらるお川志やつら下さうま  
きどぶづんりあん時ぐえん又音か私親  
見せはとちうらバキチンくの事  
後り尚せらるれをそ人と何れもか  
お出たも勢ぬが漸くいとたつて  
たるうい急い勢を一ツ思を出



おん苦力扱あつてまなまをさくをさす川  
て下ろしませ早扱もろく解しを

○あんどろの下四と上四に向ひ中まはる  
やい号をを救年下四後もばと免て  
阿のとりと向て是のうお換ししと  
下ろき替りに上四小あふと中まは  
まはと四中あするやをを扱くふ替  
あふをさふとあつてやあろく下四と  
まのう下に及ねあふぬをいふとサア

まをむしやの扱こが日頃の選とく  
まやあんで下夜さかろくにせよあ  
ぬイヤあぬと是ろまにいつ阿がりに  
あつてあをえふにせり合あするまへ  
しあしああくコリヤあふく何とさハ  
をさろくは肉く燃んる川がいやちやを  
よをまあ免まきれやあはあぬ由へ  
あていすあきれぬと阿んぞく真徳の  
張へあはあはあきれいあんとく







